

にきちんと正座して、ご飯とみそ汁だけの質素なもの。「はじめのうちは食べ物もなれていませんでしたし、畳の上での生活、座る生活、行儀（ぎようぎ）作法など、戸惑うことが多かったですが、段々となれて今では不自由を感じません。天候は日本の夏はとても湿気が多くて蒸し暑いですが、冬の寒さはバンクーバーと大体同じですね」

話をしても、わからない日本語があると、すぐ辞典を持ち出してきて、いちいち確かめる。「充実」という言葉がわからなくて何度も辞典で確かめ、勉強するマーチンさん。立ち居ふるまい、あいさつひとつにも誠実な人柄がにじみ出ていて、好感が持てる。

「発心寺での八年間にわたる生活。何を思い、何を感じますか」の問いに、マーチンさんの返事は、「道を求めるとひとくちに言ってもなかなか……。また修行の途中です。人間にはいろんな悩み、苦しみがあり、煩惱（ぼんのう）があり、仏教の言葉にある解脱（げだつ）への道は厳しく遠いものがあります」

マーチンさんにはカナダのバンクーバーで電気関係の会社に勤める父と、それに母、そして二人の姉妹がいるが、マーチンさんは「今のところまだ当分、小浜の発心寺にいます。いつ国へ帰るのか、先のことはわかりません」という。

お盆の仏事や新年の祝いに訪れてくる檀家の接待を通して、〃とし（年）〃の移りを知り、新緑の春や紅葉の秋、雪の冬に季節の移り変わりを知るだけ。ひたす

ら座禅を組み、めい想し無心無我の中から内面的心性の究明を求める……。その求道の姿は日本人も外国青年も同じ。き

ガストン・プチ

多面的に活躍する美術家修道士

岡村 正

ケベック州トロワ・リビエール生まれのフランス系カナダ人であるガストン・プチ氏は、「音楽家になろうか、それとも美術家になろうかと考えましたが神父になりました」という。いまドミニコ会士の芸術家として活躍しているから、だいたい希望通りに進んだわけである。

滞日二十二年のプチ氏が住んでいるのは、東京渋谷区南平台、鳶のからまつたカトリック教会の裏庭にある鉄骨造りの大きなアトリエ兼書斎。この住まいは千客万来。各界の人びとが訪れるのは、その暖かいもてなしと、ひよつとすると主人の見事な腕前の手料理に魅かれてかも知れない。

美術界における業績を紹介するだけで優にこの紙数は尽きる。「人は何をしていたかではなく、何をしようとしているかで受けとめなければならぬ」というのがプチ氏の口癖だから、それに免じて過去のタイトルの紹介は省かせていただく。

溢れるように旺盛な好奇心の人で、世界中どこへでも出かけて行き、その人びとに会い、話し、仕事をする。生活の

ようもマーチンさんは墨染めの法衣姿で禅堂にこもり心静かにめい想する。

（福井新聞小浜支社長）

大半は旅であるといつてよい。

キリスト教はいうに及ばず、仏教、ヒンズー教、イスラム教、インカ、エスキモト等々あらゆる宗教・文化に興味を持ち、それも書籍のみでなく、直接現地を訪ね体験を重ねるやり方でものにする。もちろん日本文化は大好きで造詣も深い。来日して書道をさる名家に師事し、たちまち古代から現代に至る書体を習得してしまった。不二竹心という雅号を持っている。その雅号のとおり、素直でしなやかな感性の主である。

「美術家」と紹介するしかないほど創作活動も多方面にわたり、油絵はもとより、リトグラフ、シルクスクリーン、木版など版画、彫刻、塑造、作陶、ステンドグラスと、ひとつどころにとどまることがない。

どれひとつ取りあげても十分に語る

ことが出来る博覧強記ぶりだが、そのすべてを使って現代世界を読みとろうとするところにプチ氏の本領がある。

異なつた時代、異なつた空間、異なつた文化のなかに生まれたもの同士の衝突と共存の神秘が、プチ氏の心を魅きつけてやまないように見受ける。これこそすぐれて現代世界の課題だからである。

したがって具象・抽象などというスタイルによる分類は、プチ氏の仕事には何の意味もない。

氏にとっては、どんなスタイルもそれだけ独立しての価値はなく、現代世界というコンテキストにおいて意味をもつこ



自宅の畳の上でくつろぐプチさん。写真は「私の部屋」提供。

とばのひとつに過ぎないのである。

言い換えれば、プチ氏の関心は物にはなく、ただ物の存在（プレゼンス）そのものにあるのである。

美術においても氏の目に映るのは唯一のもの、「私は在りて在る者である」と告げる神のみなのだ。修道士司祭の面目躍如ではないか。現代世界が興味深いの